

国立国語研究所学術情報リポジトリ

「まじめ」の原型意味論： 大学生質問紙調査に見られる規範意識

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): self standard, social standard, situation, majime-score, pleasantness-score 作成者: 山中, 信彦, 安田, 美幸, YAMANAKA, Nobuhiko, YASUDA, Miyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002202

「まじめ」の原型意味論 ——大学生質問紙調査に見られる規範意識——

山中 信彦 安田 美幸
(埼玉大学) (株式会社 角産)

キーワード
自己基準, 社会基準, 状況, まじめ度, 愉快度

要 旨

原型意味論の立場から「まじめ」が表す意味範疇の原型は「自己基準」「社会基準」を共に満たすような態度であると仮定した。大学生 119 名を対象に質問紙調査を行い、まず多数の仮想の状況の中で行動する多数の人物について、「まじめ」という形容がどの程度当てはまるか判定させた。その結果、自己基準と社会基準を共に満たす行動パターンの得点が最も高く、自己基準と社会基準のどちらも満たさない行動パターンの得点が最も低かったので、仮説は裏付けられた。また、自己基準だけを満たす行動パターンに比べ社会基準だけを満たす行動パターンの方が得点が高かった。次に回答者自身が「まじめだね／ふまじめだね」と言われた場合、どの程度うれしく感じるか評価させた。概して「まじめ」と言われた場合の方が「ふまじめ」と言われた場合よりも得点が高かったが、それは「どちらとも言えない」にあたる点数を大きく超えてはいなかった。調査全体を通じて「まじめ」に関して大学生が持つ規範意識が観察された。「規範的」という意味の記述を欠く辞書の改訂が望まれる。

1. 序論

「まじめ」という語は、誰かのことを評するときには必ずと言ってよいほど出てくるものでありながら、その意味をどのように捉えるべきか、また、自分が「まじめ」と評された時にどのように感じるかは具体的な文脈や場面によって大きく異なりうると思われる。恐らくそのためもあってか、この語を巡る少なからぬ論考が古くからある（佐々木 1964, 山本 1969, 森 1984, 森 1995, 国分 1985, 千石 1991, 菊入 1997, 和田 2003 など）。しかし、これらの論考のほとんどは示唆に富む個別的な指摘をしつつも「まじめ」の意味が自明であるかのように論を進めており、この語の持つ多様な意味合いを分析したり更には統合したりすることにまでは踏み込んでいない¹。先行研究のこのような状況、及び、国語辞書などに見られる「まじめ」の意味記述の不足を背景に山中（1997）（以下、「前稿」と呼ぶ）は多くの用例の観察に基づいて「まじめ」の色々な文脈的意味がく良いと考えられている価値基準を知った上で、それに沿ってふるまおうとするさま>という意義素によって統一的に記述しうることを論じた²。その趣旨を要約しておこう

(用例は前稿で用いたものの一部を新しいもので置き換えてある。年月日の付いた用例は『朝日新聞』からとったもの)。

「まじめ」の文脈的意味の一つは次の(1)～(3)に見られるような‘いいかげんな気持ちではない’という意味(以下、‘本気’と呼ぶ)である。

(1) そしてある日、主人公ムルソーはピストルで一人のアラビア人を撃ち殺した。何故? ^{なぜ}

裁判所判事の質問に対してムルソーはまじめに答える。“それは太陽のせいだ”。(2007年5月27日)

(2) この五月、IBMのコンピューター「ディープブルー」が、チェスの世界チャンピオンであるガリ・ガスパロフ氏を破ったというニュースは、もはや口にする人さえ少なくなりつつある。この勝利をもって「コンピューターが人間より賢い」とまじめに信じ込む人はまずいないだろう。(1997年9月13日)

(3) 私は自然に笑っちゃうんです。仕事はまじめに笑いながらやる。それは仕事をやっていないということではなくて、仕事を楽しくやっているということでしょう。(1998年3月4日)

もう一つは次の(4)～(6)に見られるような‘規則や良識や常道などにかなっている’という意味(以下、‘規範的’と呼ぶ)である。

(4) ルールの意味は関係なく、ただ守れるか守れないかの問題らしいのです。どんなにそれがくだらなく、意味のないものでも、守ればまじめ、破れば不良です。(2001年1月27日)

(5) おやじは消防士だった。まじめが制服着て歩いているような男で、酒、たばこ、かけ事一切やらない。(1997年1月27日)

(6) 本を買ってきたときに、もっともまじめな読み方では第一ページから読みにかかる。(森1984:203)

もっとも、次の(7)～(9)に見られるように、‘本気’‘規範的’のどちらの意味にも解釈できる用例が非常に多い。

(7) さすがに昨今はまじめの弊害に気がつきはじめた人も多いが、「遊べ」といわれた課長が胃潰瘍になっているかぎり、まじめはまだまだ日本人にとって最高の価値の一つである。(森1995:210)

(8) たまたま上院議員になった地方都市のまじめな青年が、議会で、土木工事をめぐる先輩議員の不正を暴くべく、熱弁をふるう。そのひたむきさに打たれ、悪徳議員も改心するという筋書き。(1997年7月4日)

(9) 所属したワンダーフォーゲル部ではすべての山登りに参加。「汗をかきながら先生と山に登るまじめな生徒という印象」だったという。(2005年11月12日)

前稿ではこれらについて、‘規範的’という意味を含む用例(4)～(9)は前述した意義素から自然に説明することができるし、‘本気’という意味だけを含むように見える用例(1)～(3)も実は<良いと考えられている価値基準に沿ってふるまおうとする>ということを含んで

おり（例えば、質問に対しては原則として率直に答えることが良いとされている），たまたまその価値基準と自分自身の価値基準が合致しているのに過ぎないのだと論じた。このような説明は「まじめ」の色々な文脈的の意味を一元的に捉えることができるという長所があるが、「まじめ」の最も典型的な用法をその他の用法から区別できないという短所がある。後者に関しては、「本気」という意味要素を含まない用法に違和感を覚えるという意見もある（久島 1998:51）。また、前稿では＜良いと考えられている価値基準＞を我々の属する社会の価値基準と規定したが、「本気」という意味が前景化されている用例については自分自身の中に取り込まれた社会的な価値基準という観点から理論的には説明できるものの、主観的にはやはり自分自身の価値基準が問題になっているという感覚は残る。

そこで本稿では前稿の考え方を少し修正し、「まじめ」の意義素はそのままの形で残すものの、＜良いと考えられている価値基準＞に大きく自己基準と社会基準の二つを認め、それらの満たされ方に「まじめ」の用法の適切さが依存するという仮説を立てた。また、何を「まじめ」の適切な用法と思うかは、自分が「まじめ」と評された時にどのように感じるかという評価的な意味要素と関わっていると思われる。そこでこれらの仮説を検証するために質問紙調査を行った。次節では調査の理論的枠組みである原型意味論について略述するとともに上の仮説をより詳しく説明する。

2. 原型意味論

原型意味論が現れる以前に支配的であった考え方は、語の意味がいくつかの意義特徴の束から構成されており、必要十分条件としてのこれらの特徴の全てを持つときに限って、ある事物はその語の指す範疇の例として認められるというものであった。この考え方によれば、ある事物はその語の指す範疇に属するか或いは全く属さないかのいずれかであり、範疇に属する成員の間には範疇への適合度に関する差がないことになる。これに対して、原型意味論では意味範疇というものがしばしば曖昧な境界を持つことを認め、ある事物がその語の指す範疇に属するか否かは程度の問題であるとし、その範疇を代表するもっとも中心的な成員を原型（prototype）と呼ぶのである。

このことを具体的に説明するために、筆者らの調査が直接依拠する Coleman & Kay (1981) の英語の *lie* についての研究を紹介しておこう。Coleman らは *lie* の原型を構成する要素として (a) 命題が実際に虚偽である (b) 話し手が命題を虚偽であると信じている (c) 話し手が受け手を欺こうと意図している、の三つを仮定し、それぞれの要素を持つか欠くかによって可能となる 8 通りのパターンに対応する発話行為を含む 8 個の話を被験者に提示して当該の発話行為が *lie* と言えるかどうかを判定させた。その結果 3 個の要素のうち多くを持つ発話行為ほど高い判定値を得たこと、判定値に寄与する度合いに関して 3 個の要素の間には差があり重要な順から (b) (c) (a) となることを見出した。

筆者らは Coleman らの研究に倣い、「まじめ」が表す意味範疇についていくつかの仮説を立てた。まず、前稿と同じく＜良いと考えられている価値基準を知った上で、それに沿ってふるまお

うとするさま>という基本義から出発しつつも、「誰」によって「良いと考えられている」価値基準であるかに関しては前稿とは異なり、「自分自身」によって、及び、「社会」によっての大きく二種類があると考えた（以下ではこれらをそれぞれ「自己基準」、「社会基準」と呼ぶ）。言い換えれば、何かあるふるまいをするに当たっては通常、自分としてはどうするべきか（どうしたいか）ということと、そのふるまいが周囲からどう評価されるかということを考慮するということである（このことは我々の日常経験から言って無理のない仮定であろう）。更に、これら二種類の価値基準を共に満たすような態度が「まじめ」の原型であること、二種類の価値基準の相対的重要性には差があり、社会基準のほうが重要であることを仮定した（この最後の仮定に関しては前稿の考え方を継承するものである）。

3. 質問紙調査

3.1. 調査の方法

前節の最後で述べた仮説によれば「まじめ」の二つの構成要素を持つか欠くかによって4通りのパターンが可能となる。即ち、自己基準、社会基準と共に満たす場合（パターン1）、自己基準だけを満たす場合（パターン2）、社会基準だけを満たす場合（パターン3）、自己基準、社会基準のどちらも満たさない場合（パターン4）である（以下、「パターン1」を「PT1」のように略す）。

もっとも、この分類にはいくつか問題があるかもしれない。と言うのは第一に、「自己基準」だけを満たすとされる場合でもその「自己基準」が社会的に是認された基準の内面化したものであることがよくあるうえに、そもそも自分の信念に従ってふるまうこと自体がかなりの程度社会的に是認されているとも言えるし、一方「社会基準」だけを満たすとされる場合でも節を曲げても「社会基準」に従ったほうがよいという自分の考えに従っている、とも言えるからである。むしろ、PT2について言うならば後であげる例に見られるように、自己基準に沿ってふるまう際に明らかに抵触してしまう何らかの社会基準が存在する点でPT1と異なる、と特徴づけるべきかもしれない。第二に、*lie*の構成要素と異なり、筆者らが仮定した「まじめ」の二つの構成要素はそれぞれが完全に存在するか全く存在しないかのどちらかというのではなく存在する程度が高いか低いかというように見るべきものと考えられるからである。しかしながら本稿では以下便宜的に、「構成要素を持つ／欠く」という表現をすることにする。

さて、上述したパターンと「まじめ」の関係を探るため、仮想の状況を多数設定しその中でこれらのパターンに対応する行動をとる仮想の人物について、「まじめ」という形容がどの程度当てはまるか答えさせることにした。ただし、筆者らの直観だけに頼って各状況をパターンに割り当てるに恣意的になるおそれがある。そこで、まず各状況が自己基準、社会基準をどの程度満たすかについて回答者自身がどのように判定しているかを調査した（以下、「調査①」と呼ぶ）。

調査①は、「まじめ」という言葉は一切使用せず、「人間の行動の要因に関するアンケート」の名の下に行った。質問紙の回答要領において、人間の行動を動機づける要因は「本人の意向」と「社会の規範」の二つに大きく分けることができるとして、それぞれを「その人自身が良いと考え

ている価値基準（信念、方針、志向など）」「その人が属する集団や社会が良いと考えている価値基準（規則、常識、慣習など）」と定義した³。そしてC～Yの23状況のそれぞれについて登場人物の行動が「本人の意向」と「社会の規範」の各々にどの程度従っているかを6段階尺度（非常によく従っている・かなりよく従っている・少し従っている・少し反している・かなり反している・非常に反している）で判定させた（今述べた順に6点～1点）。調査①で設定した23状況を筆者らが想定したパターンごとにまとめると次のようになる（質問紙では状況を登場人物のアルファベット順に提示した）。

P T 1：自己基準、社会基準を共に満たす場合

Cは、大学に現役で合格したいが、前回の模試の成績が悪かったので、次はいい成績をとろうと勉強する。／Gは、愛する夫が体調を崩したので、毎日病人食を作って食べさせた。／Oは、将来福祉関係の職に就きたいので、空いている時間は積極的にボランティア活動に参加するようにしている。／Sは、事故に遭いそうになったことがあるので、夜自転車に乗るときはライトをつける。／Wは、授業が始まる前に、余裕をもって教室に入るよう心掛けている。

P T 2：自己基準だけを満たす場合

Fは、捨て猫を放つておけなかったので、ペット厳禁のアパートで1週間世話をした。／Iは、次の日の卒論発表会について質問したいことがあったので、夜の12時過ぎだったが担当の先生に電話をかけた。／Lは、担任している生徒の推薦文を書く必要があったが、あまりにも出来の悪い生徒なので推薦文をあまり多く書かない方が良心的だと思ったので、「授業には毎回出席していた。対人関係は良好」と2行だけ書いて提出した。／Nは、図書館で借りた本が、趣味で集めた昆虫を調べるのに非常に役立つと思ったので、無断で2週間ほど延滞して返却した。／Rは、授業中に、眼鏡を醒まして集中して聴くためにミント臭の強いガムを噛む。／Uは、有名な進学校に在学しているが、将来スポーツ選手になりたいので、進級できなくなる限度ぎりぎりまで授業を休んでジムに通い体力作りに励む。／Xは、全くの健康体だが、もっと元気になりたいので、健康食品やサプリメントを1日200種類以上取る。

P T 3：社会基準だけを満たす場合

Eは、足が痛むので電車で座っていたかったのはやまやまだったが、周囲の目が気になって渋々お年寄りに席を譲った。／Hは、ふだん授業中に冗談を言ってクラスメートを笑わせるのが好きだが、授業参観日には、来ていたのが父親だったのでおとなしくしていた。／Kは、親にきつく言われて、しかたなく1日1箱吸っていた大好きなタバコをやめた。／Pは、募金には全く興味がなかったが、クラスのほとんどの人が募金していると言われたので募金した。／Tは、あまりよく知らない教授の退官記念講演会で、教授の書いた数式に大きな誤りがあることを確信していたが、質疑応答の時間にもあえて指摘しないで最後まで清聴した。／Yは、病弱のため常に体がだるく何もやる気がわからないが、上司に身だしなみを厳しく注意されて以来、ひげだけは毎日剃っている。

PT4：自己基準、社会基準のどちらも満たさない場合

Dは、お金に困っていたところ、尊敬する伯父さんに入学祝いにお金をもらったが、たまたま目に入ったパチンコ屋でつい使ってしまった。／Jは、第一志望の就職先から内定をもらっているが、卒業年度の後期試験で、単位を落とせば留年が決まる必修科目の問題がさっぱり解けず、答案用紙に猿の絵だけを書いて提出した。／Mは、大学の相談員の職にあるが、財布をなくした後で不機嫌だったので、学生の話を右から左に聞き流した。／Qは、二日酔いになって苦しんだことがあるのに、発作的にまた、まずいウイスキーの一気飲みをした。／Vは、試験前になつたら慌てることになるとわかっているながら、授業中にたいして面白くもない漫画を流し読みした。

回答者は日本語を母語とする埼玉大学の5学部の学生53名(男子27名、女子26名;18~23歳)である。全体及び男女別の集計結果(平均値、標準偏差)を状況ごとに表1に示す(「自」と「社」はそれぞれ「本人の意向」と「社会の規範」を表す。以下の本文でも同様)。

表1 状況ごとの自己基準と社会基準の平均値及び標準偏差(バターン順) (n=53:男27、女26)

	PT1							
	C		G		O		S	
	自	社	自	社	自	社	自	社
全 体 平 均	5.26 (0.79)	5.30 (0.70)	5.19 (0.83)	5.08 (0.96)	5.30 (0.80)	5.45 (0.64)	5.13 (0.92)	5.64 (0.59)
男 子 平 均	4.93 (0.87)	5.19 (0.74)	5.15 (0.95)	4.93 (1.11)	5.11 (0.97)	5.41 (0.75)	4.93 (1.00)	5.56 (0.64)
女 子 平 均	5.62 (0.50)	5.42 (0.64)	5.23 (0.71)	5.23 (0.76)	5.50 (0.51)	5.50 (0.51)	5.35 (0.80)	5.73 (0.53)
自社の差の 検定におけるt値	-0.36		0.85		-1.48		-4.51	

	PT2													
	F		I		L		N		R		U			
	自	社	自	社	自	社	自	社	自	社	自	社		
全 体 平 均	4.43 (1.03)	2.38 (1.06)	4.38 (1.23)	1.98 (0.84)	4.17 (1.01)	3.08 (1.09)	4.75 (0.98)	1.81 (0.71)	4.38 (0.92)	3.00 (0.90)	5.08 (0.87)	3.00 (1.04)	4.72 (1.17)	2.62 (1.04)
男 子 平 均	4.37 (1.15)	2.59 (1.25)	4.52 (1.09)	2.04 (0.90)	4.26 (1.13)	3.11 (1.25)	5.04 (0.81)	1.89 (0.70)	4.37 (1.15)	2.93 (0.96)	5.04 (1.02)	3.07 (1.14)	4.74 (1.23)	2.93 (1.11)
女 子 平 均	4.50 (0.91)	2.15 (0.78)	4.23 (1.37)	1.92 (0.80)	4.08 (0.89)	3.04 (0.92)	4.46 (1.07)	1.73 (0.72)	4.38 (0.64)	3.08 (0.84)	5.12 (0.71)	2.92 (0.93)	4.69 (1.12)	2.31 (0.88)
自社の差の 検定におけるt値	9.90		11.65		5.97		17.86		7.36		12.36		9.85	

\	PT3											
	E		H		K		P		T			
	自	社	自	社	自	社	自	社	自	社		
全 体 平 均	2.74 (1.08)	5.17 (0.78)	3.38 (1.20)	4.36 (1.04)	2.13 (1.14)	4.96 (0.73)	2.81 (0.88)	4.66 (1.02)	3.11 (1.27)	3.85 (1.18)	3.15 (0.91)	4.55 (1.01)
男 子 平 均	2.59 (1.19)	5.37 (0.79)	3.07 (1.33)	4.22 (1.09)	1.89 (0.97)	4.93 (0.73)	2.67 (0.83)	4.59 (1.19)	3.33 (1.36)	3.67 (1.30)	3.00 (0.88)	4.52 (1.09)
女 子 平 均	2.88 (0.95)	4.96 (0.72)	3.69 (0.97)	4.50 (0.99)	2.38 (1.27)	5.00 (0.75)	2.96 (0.92)	4.73 (0.83)	2.88 (1.14)	4.04 (1.04)	3.31 (0.93)	4.58 (0.95)
自社の差の 検定における t 値		-13.86		-5.29		-14.33		-11.08		-2.94		-7.78

\	PT4									
	D		J		M		Q		V	
	自	社	自	社	自	社	自	社		
全 体 平 均	3.96 (1.70)	1.77 (0.72)	2.66 (1.48)	1.77 (0.87)	4.42 (1.17)	1.74 (0.76)	3.23 (1.23)	2.30 (0.95)	3.57 (1.15)	2.25 (0.73)
男 子 平 均	4.04 (1.74)	1.78 (0.75)	2.52 (1.63)	1.81 (0.92)	4.78 (1.09)	1.85 (0.82)	3.07 (1.14)	2.44 (0.97)	3.59 (1.25)	2.22 (0.75)
女 子 平 均	3.88 (1.68)	1.77 (0.71)	2.81 (1.33)	1.73 (0.83)	4.04 (1.15)	1.62 (0.70)	3.38 (1.33)	2.15 (0.92)	3.54 (1.07)	2.27 (0.72)
自社の差の 検定における t 値		9.64		4.30		14.70		5.65		8.09

注：括弧内は標準偏差。

表 1 に基づき、想定したパターンに適合する状況として PT 1 からは C, G, O, S, W を、PT 2 からは F, I, N, U, X を、PT 3 からは E, K, P を、PT 4 からは J, Q を、選び出した。選ぶに当たっては次の目安を用いた。PT 1 と PT 4 については、(ア)「自」と「社」の全体平均値の両方が 4 以上または 3 以下である (イ)「自」と「社」の全体平均値の差の絶対値が 1 以下である。PT 4 の Q についてだけは (ア) を満たしていないという問題があるが、Q の「自」の全体平均値は 3 をわずかに超えているに過ぎず、また、J だけだとパターンとしての安定性が保てないので Q も PT 4 に含めることにした。PT 2 と PT 3 については、(ウ)「自」と「社」の全体平均値のうち高い方が 4 以上であり、低い方が 3 以下である (エ)「自」と「社」の全体平均値の差の絶対値が 2 以上である。PT 3 の P についてだけは (エ) を満たしていないという問題があるが、差の絶対値は 2 をわずかに切っているに過ぎず、また、E, K だけだと所属する状況の数が PT 2 と比べて半分以下になるので P も PT 3 に含めることにした。なお、目安の (イ) (エ) については「自」と「社」の差の絶対値だけに頼ることになるので、これを補完するために「自」と「社」の差の t 検定を行った（表 1 参照）。その結果に照らして言うと、(イ) は t 値の絶対値が 6 以下であるということにほぼ対応し、(エ) は t 値の絶対値が 10 以上であるということにほぼ対応する。上で問題にした P の t 値の絶対値はほぼ 11 であり、t 値で判断するかぎり「自」と「社」の差が (F や X の場合と比べても) 十分あると言うことができる。

次に、調査②として、「まじめ」という言葉に関する質問紙調査を行った。質問項目は大きく三つの設問に分かれる。設問Ⅰでは、何らかの行動をとるか何らかの性質を持つ仮想の人物について、「まじめ」という形容がどの程度当てはまるか（以下、「まじめ度」と呼ぶ）を7段階尺度（非常によく当てはまる・かなりよく当てはまる・少し当てはまる・どちらとも言えない・あまり当てはまらない・ほとんど当てはまらない・まったく当てはまらない）で判定させた（7点～1点）。その際、調査①で選んだ15状況（アルファベット順は元の通り）に新たに次の2パターン11状況を加えた。

PT5：ステレオタイプ

Aは、ニュース番組をよく観る。／Dは、ロックを好んで聴く。／Hは、犬が好きだ。／Mは、サングラスをかけている。／Rは、バラエティ番組をよく観る。／Tは、猫が好きだ。／Vは、クラシックを好んで聴く。／Yは、黒ぶちめがねをかけている。

PT6：「まじめ」とまったく関係がない場合

Bは、カレーライスをときどき食べる。／Iは、天気が良い日にはよく川へ釣りに行く。／Zは、プールではよく平泳ぎをする。

PT5とPT6を加えた目的は二つある。第一に、我々は自己基準、社会基準の充足度にではなくステレオタイプに基づいて誰かを「まじめ」かどうか判断することがあるのではないかということを調べるためにある。このため、まじめ度が違うと予想される対比的な状況（「クラシック／ロックを好んで聴く」など）を4組用意した。第二に、自己基準、社会基準に関する4パターンの15状況の中にそれらと関係しない状況を適当に混ぜることによって設問Ⅰの調査の狙いを目立たないようにするためである。

設問Ⅱでは、4種類の人（指導してもらっている先生／親／親しいクラスメイト／あまり親しくないクラスメイト）から回答者自身について「まじめだね／ふまじめだね」と言われた場合どのように感じるか、8個の場合（以下、「場面」と呼ぶ）のそれぞれにつき7段階尺度（非常にうれしい／かなりうれしい／少しうれしい／どちらとも言えない／少し不愉快だ／かなり不愉快だ／非常に不愉快だ）で評価させた（7点～1点）。

設問Ⅲでは、回答者自身について誰かに「まじめ／ふまじめ」と言われて、うれしい／不愉快だと感じるときは、回答者がどのようなことをした（またはしなかった）ときか、4個の場合のそれにつき具体的な状況を自由に記述させた（なお、そのような状況がありえないと判断したときは「なし」と書くよう指示した）。

回答者は日本語を母語とする埼玉大学の5学部の学生119名（男子67名、女子52名；18～25歳）であり、調査①の回答者を含まない⁴。なお、調査①と調査②はいずれも2007年7月に行った。

3.2. 調査結果の分析と考察

本節では、調査②で明らかになった主な点について述べる。なお、性別による差はあまり観察されなかったので、以下では特に断わらない限り回答者全体のデータの分析に基づいて論じる。

3.2.1. 設問Ⅰの分析と考察

全体及び男女別の集計結果（平均値、標準偏差）を状況ごとに表2に示す。

表2 状況ごとのまじめ度の平均値及び標準偏差（パターン順） (n=118：男67、女51)

	PT1					PT2					PT3		
	C	G	O	S	W	F	I	N	U	X	E	K	P
全体平均	5.30 (1.16)	4.96 (1.53)	6.00 (0.97)	4.63 (1.27)	5.58 (1.03)	3.88 (1.30)	3.81 (1.65)	2.47 (1.16)	3.84 (1.52)	3.22 (1.25)	4.77 (1.36)	4.32 (1.55)	3.92 (1.14)
男子平均	5.34 (1.19)	5.13 (1.64)	6.01 (0.99)	4.88 (1.19)	5.57 (1.03)	4.01 (1.40)	4.07 (1.70)	2.52 (1.21)	4.03 (1.63)	3.28 (1.35)	4.90 (1.40)	4.25 (1.65)	3.87 (1.11)
女子平均	5.24 (1.12)	4.73 (1.36)	5.98 (0.95)	4.29 (1.30)	5.59 (1.04)	3.71 (1.14)	3.47 (1.53)	2.41 (1.10)	3.59 (1.33)	3.14 (1.11)	4.61 (1.28)	4.41 (1.43)	3.98 (1.17)

	PT4			PT5						PT6			
	J	Q	A	D	H	M	R	T	V	Y	B	L	Z
全体平均	2.19 (1.46)	3.05 (1.22)	5.18 (1.03)	3.65 (1.24)	3.76 (1.08)	3.56 (1.01)	3.66 (1.10)	3.84 (1.12)	4.11 (1.15)	3.96 (1.10)	3.52 (1.33)	3.79 (0.96)	3.77 (1.12)
男子平均	2.37 (1.67)	3.24 (1.24)	5.16 (1.11)	3.70 (1.33)	3.87 (1.23)	3.51 (1.04)	3.66 (1.19)	3.91 (1.22)	4.15 (1.34)	3.96 (1.20)	3.58 (1.39)	3.82 (1.11)	3.81 (1.25)
女子平均	1.96 (1.09)	2.80 (1.15)	5.20 (0.94)	3.59 (1.12)	3.63 (0.85)	3.63 (0.98)	3.67 (0.97)	3.75 (0.98)	4.06 (0.83)	3.96 (0.96)	3.43 (1.25)	3.75 (0.72)	3.73 (0.94)

注：括弧内は標準偏差。

まず、第2節の最後で述べた仮説を検証するため、それぞれのパターンに属する状況のまじめ度の平均値の合計を状況数で割ってパターン(PT1～6)ごとのまじめ度平均値(全体、男女別)を出し(表3)、パターンによって差があるかどうかを分散分析で検定し多重比較を行った。その結果PT2とPT6の対以外の全ての対の間に有意な差 [$F(5,585) = 174.32, p < .001$] があることがわかった⁵。

表3 パターンごとのまじめ度の平均値

(n=118：男67、女51)

	PT1	PT2	PT3	PT4	PT5	PT6
全体平均	5.29	3.45	4.34	2.62	3.97	3.69
男子平均	5.39	3.59	4.34	2.81	3.99	3.74
女子平均	5.16	3.26	4.33	2.38	3.93	3.63

まとめると次のようになる⁶。

PT1 > PT3 > PT5 > PT6 = PT2 > PT4

ここでは主として自己基準と社会基準が関わるPT1～4について論じる。まず、自己基準と

社会基準を共に満たす PT 1 のまじめ度が最も高く、自己基準と社会基準のどちらも満たさない PT 4 のまじめ度が最も低くなっている。この限りでは「まじめ」の原型に関する仮説は裏付けられたと言えよう。次に、自己基準だけを満たす PT 2 と社会基準だけを満たす PT 3 を比べると後者の方がまじめ度が高くなっていることが注目される。しかも両者のまじめ度が「どちらとも言えない」に相当する 4 点の両側に位置していることは重要である。平たく言えば、社会の規範に嫌々従っている人はどちらかと言うと「まじめ」であり、社会の規範を無視して自分の考えを貫く人はどちらかと言うと「まじめ」でない、とみなされているのである⁷。実際 PT 2 は、「まじめ」とそれほど関係がないと想定される PT 5 よりまじめ度が有意に低いし、「まじめ」と全く関係がないと想定される PT 6 に比べてさえまじめ度が有意ではないにせよ低いのである。ただし、自己基準と社会基準のどちらが「まじめ」にとってより重要であるかについては、PT 3 のまじめ度が PT 2 のそれより高いということだけからは明確には結論できない。というのは、調査①の表 1 によると PT 3 に属する E, K, P は PT 2 に属する F, I, N, U, X に比べ「自」と「社」の合計点が高い傾向にあり（PT 3 から選び出された 3 状況、PT 2 から選び出された 5 状況の全体平均はそれぞれ 7.49 と 7.03 である）、PT 3 のまじめ度が PT 2 のそれより高いのはこのことの反映に過ぎないとも考えられるからである。

次に、26 個の状況それぞれの間でまじめ度に有意な差があるかどうかを分散分析で検定し多重比較を行った。有意差 $[F(25,2925) = 73.07, p < .001]$ が観察されたが、既に述べたパターン間比較の結果とかなり重複するので、主としてパターン内における顕著な差について述べ、その差が生じた原因について簡単に考察することにする。

PT 1 に属する状況のまじめ度の序列は次のようにまとめられる。

$$O > W \geq C \geq G \geq S$$

O のまじめ度が最も高いのはボランティア活動というものが単に社会基準に反していないというだけでなく、積極的に社会に役立つ行動とみなされていることによると思われる。これに対して S のまじめ度が最も低いのは、「事故に遭いそうになったことがあるので、ライトをつける」ということから「事故に遭いそうになったことがなければ、ライトをつけない」ということを暗黙のうちに導き出し、そのような態度を怪しからぬと感じた回答者がかなりいたことによるのではないかと考えられる。

PT 2 については、 $F = U \geq I \geq X > N$ である。

PT 2 は総じてまじめ度が低いが、社会基準に反することによる失点が、F については捨て猫を助けたいという義侠心によって、U については自分の人生設計を達成したいというひたむきさによって減殺されたものと思われる。I と N は比較的似た状況であるが、かなりの差が出たのは前者が学生としての本務に関する事であるのに対し、後者は趣味の領域に関する事であるため、より自己中心的な行動と受け取られやすいことによるものであろう。N はパターンとしては最下位の PT 4 の Q と比べてさえも有意に低いのである。

PT 3 については $E \geq K \geq P$ である。

P が単なる付和雷同と受け取られかねない状況であるのに対し E は目の前にいる弱者のため

に自己を犠牲にしたと受け取れる状況であり社会基準をより高度に満たしていると言えよう。

PT 4については $Q > J$ である。

Q がストレスを発散させるためのやむにやまれぬ行動として「しかたがない」と解釈されやすいのに対し、 J は事態の深刻さに比していかにもふざけている行動であるためまじめ度が低く評価されたものと思われる。

PT 5については $A > V \geq Y = T = H = R = D \geq M$ である。

A の高さだけは注目に値する。 A はパターンとしては最上位の PT 1 の平均値に近く、 S より有意に高い。また、PT 3 の K と P より有意に高い。このような結果になったのは、 A が筆者らの意図したステレオタイプとしてではなく、むしろ価値基準、とりわけ社会基準を満たすものとして受け取られたことによる、と考えることもできるだろう。つまり、ある程度以上の年齢に達したら社会常識を身に付けるべくニュースに接することが一般に期待されているわけである。ただし、 A は設問 I の最初に位置しているので、回答する際に既に検討した他の状況と比べて判定することができないことが何らかの影響を与えた可能性も捨てきれない。ステレオタイプのその他の対比的状況の対については筆者らの予想に反し、有意差は見られなかった。かろうじて有意差が見られたのは対比的状況の対ではない V と M の間だけである。

PT 6については $L = Z = B$ である。

筆者らの予想通り状況間に有意差はなく、全て「どちらとも言えない」に近いまじめ度と判定された。

以上見てきたように、パターン同士の間に有意な序列がある一方で各パターンに属する状況同士の間にも有意な差があり、その差は場合によっては異なるパターンに属するある状況との間でパターン間の序列の逆転現象を生み出す程度まで達している。自己基準と社会基準の充足度の組み合わせだけでなく個々の状況に特有の要因もまたまじめ度の判定に影響していることが窺える。

さて、26 個の状況のまじめ度を状況ごとにどの程度区別して判定するかについては回答者の個人差がかなりあると想定される。つまり、状況ごとに 7 点から 1 点まで細かく判定し分ける回答者がいる一方で、どの状況についても大体同じような点数をつける回答者もいると考えられるのである。概して言えば前者のような回答者は「まじめ」という言葉に対し敏感であり、後者のような回答者は「まじめ」という言葉に対し鈍感であるか設問に対していい加減に回答していると考えることができよう。ここで興味のある問題は、まじめ度を状況ごとにどの程度区別して判定するかによってパターンに対する反応が違ってくるかどうかということである。このことを調べるために回答者の一人一人について 26 個の状況のまじめ度のばらつきの指標である標準偏差を計算し（最小値 0.46、最大値 2.69、平均値 1.34）、それとその人自身のパターンごとのまじめ度との相関を見てみた。その結果、回答者全体については 26 状況のまじめ度の標準偏差と PT 4, PT 5, PT 6 との間にそれぞれ -0.23 , -0.25 , -0.26 の有意な相関（Pearson の相関係数）があった。このことは、弱い傾向ではあるが、「まじめ」という言葉に対し敏感な回答者は PT 4, PT 5, PT 6 に属する状況のまじめ度を低く判定していることを示している。この傾向は男

女別に調べると女子により顕著である（それぞれ -0.61, -0.34, -0.32。男子は PT 6についてだけ有意で -0.24）ことがわかった。つまりとりわけ女子は、低いまじめ度をつけることがもともと期待されている PT 4 に対して思いきり低く判定し、中間的なまじめ度をつけることが期待されている PT 5, PT 6 に対しても低く判定する傾向があるということである。以上のことを見解するならば、女子は「まじめ」という言葉に対し敏感な回答者ほど特に PT 4 に属する状況を「ひどい」と感じるということになろう。

3.2.2. 設問Ⅱの分析と考察

全体及び男女別の集計結果（平均値、標準偏差）を場面ごとに表4に示す。

表4 場面ごとの愉快度の平均値及び標準偏差（n=113：男62、女51）

	指導してもらっている先生		親		親しいクラスメイト		あまり親しくないクラスメイト	
	まじめ	ふまじめ	まじめ	ふまじめ	まじめ	ふまじめ	まじめ	ふまじめ
全体平均	4.79 (1.06)	2.52 (1.02)	4.36 (1.09)	2.76 (1.05)	4.34 (1.21)	3.53 (1.09)	3.91 (1.18)	2.49 (1.19)
男子平均	4.74 (1.09)	2.55 (1.07)	4.21 (1.16)	2.81 (1.04)	4.71 (1.27)	3.56 (1.21)	4.06 (1.20)	2.35 (1.22)
女子平均	4.84 (1.05)	2.49 (0.97)	4.55 (0.97)	2.71 (1.08)	3.88 (0.97)	3.49 (0.92)	3.73 (1.15)	2.65 (1.15)

注：括弧内は標準偏差。

表5 系列（まじめ／ふまじめ）ごとの愉快度の平均値
(n=113：男62、女51)

	まじめ	ふまじめ
全体平均	4.35	2.83
男子平均	4.43	2.82
女子平均	4.25	2.83

まず、8場面を（i）「まじめだね」と言われた場面（ii）「ふまじめだね」と言われた場面の2系列に分け、それぞれの系列に属する場面での「愉快度」（回答者自身がどの程度うれしく感じるか）の平均値の合計を場面数4で割って系列ごとの愉快度平均値（全体、男女別）を出し（表5）、性別や系列によって差があるかどうかを分散分析で検定した。その結果、系列の間にのみ有意な差 [$F(1,111) = 180.81, p < .001$] があることがわかった。つまり、概して言えば「まじめ」と言われた場合のほうが「ふまじめ」と言われた場合よりも愉快度は高いということである。ただし、それは相対的に言えることであって、まじめ系列の全体平均値は4.35であるからそれ自体としては「どちらとも言えない」の4点を大きく超えるようなものではないのである。この点において、従来多くの日本語の辞書や解説書で「まじめ」は肯定的な評価を伴うという旨の記述

がなされてきたことには疑問の余地があろう。例えば、飛田・浅田（1991：512）では「まじめ」はプラスイメージの語とされているし、森田（1996：161）は「真面目さを文字通り『真面目』と取ればプラスの評価だが、マイナスに査定すれば『真面目』という語は使えない。そこで『くそ真面目』といったマイナス評価の語が生まれる」と述べている。しかし、仮に中高年の人々は概して「まじめ」に良い評価を与えていたとしても、今回の調査からは若い世代はこの語にそれほど好感を覚えていないことが窺えるのである。和田（2003：24）は次のように、むしろこの語にどちらかと言うと嫌悪感を覚える若者が多いことを指摘している：

「まじめ」ということばは、今ひどく不人気のようだ。

若者を集めたトーク番組でも、まじめと思われると友だちができないと言う人が登場するし、各種アンケートを見ても、まじめと言われることも嫌だし、自分はまじめではないと思っている人が多いようだ。

次に、性別や場面によって愉快度に有意な差があるかどうかを分散分析で検定し多重比較を行った。場面間で有意差 $[F(7,777) = 79.95, p < .001]$ が観察されたが、既に述べた系列間比較の結果とかなり重複するので、系列内での差について主に述べることにする。回答者全体についてまとめると次のようになる（「指導してもらっている先生」は単に「先生」と略す）。

まじめ（先生） > まじめ（親） \geq まじめ（親しいクラスメイト） \geq まじめ（あまり親しくないクラスメイト） \geq ふまじめ（親しいクラスメイト） $>$ ふまじめ（親） = ふまじめ（先生） = ふまじめ（あまり親しくないクラスメイト）

まじめ系列では相手が先生、親の順に愉快度が高く、ふまじめ系列では相手が親しいクラスメイトの場合だけ愉快度が高くなっている、あまり親しくないクラスメイトのまじめ場面との間に有意差がなくなっている⁸。

更に、ここでは場面と性別の交互作用 $[F(7,777) = 3.42, p < .01]$ 、つまり、場面間の序列に関する性別による違いが観察された。

男子：まじめ（先生） \geq まじめ（親しいクラスメイト） \geq まじめ（親） = まじめ（あまり親しくないクラスメイト） \geq ふまじめ（親しいクラスメイト） $>$ ふまじめ（親） = ふまじめ（先生） = ふまじめ（あまり親しくないクラスメイト）

女子：まじめ（先生） = まじめ（親） $>$ まじめ（親しいクラスメイト） = まじめ（あまり親しくないクラスメイト） = ふまじめ（親しいクラスメイト） $>$ ふまじめ（親） = ふまじめ（あまり親しくないクラスメイト） = ふまじめ（先生）

男女間の主な違いは、男子が先生と親のまじめ場面の愉快度に有意差があるのに対し、女子は先生と親のまじめ場面の愉快度に有意差がなく、それら2場面と親しいクラスメイトのまじめ場面の愉快度に有意差があることである。端的に言えば、男子は先生から「まじめだね」と言わると少しうれしいが、親から言わると特にうれしくはない、女子は先生からと同様に親からも「まじめだね」と言わると少しうれしいということになる。男子に比べ女子は目上からの評価により敏感だと解釈することもできるかもしれない。

3.2.3. 設問Ⅰと設問Ⅱの関連の分析と考察

特定の状況の登場人物をどの程度「まじめ」だと判定するかということと、回答者自身が「まじめ／ふまじめ」だと言われてどの程度うれしい又は不愉快だと感じるかということは関連があるのだろうか。このことを探るために設問Ⅰに対する回答と設問Ⅱに対する回答との相関を調べてみた。以下、理論的に興味を引く相関をいくつか取り上げて論じる。

まず、3.2.1節で算出した回答者ごとの26状況のまじめ度の標準偏差とあまり親しくないクラスメイトから「まじめだね／ふまじめだね」と言わされたときの愉快度との間には弱い負の相関がある（回答者全体ではそれぞれ-0.24と-0.25。男女別に見ると有意な相関があるのは男子では「まじめだね」と言わされた場合（-0.29）だけであり、女子では「ふまじめだね」と言わされた場合（-0.33）だけである）。つまり、「まじめ」という言葉に敏感な人ほどあまり親しくないクラスメイトから「まじめ」「ふまじめ」と言わされると不愉快だと感じやすいという傾向が弱いながらもあることが窺えるのである。言い換えれば、敏感な人ほど自分をよく知らない人から軽々しく「まじめ」「ふまじめ」と評されたたくない、ということになり、直観的にも納得できよう。実際、設問Ⅲの分析において後で触れるように、そのようなコメントは回答者自身からいくつか出されている。

次に、親しいクラスメイトから「ふまじめだね」と言わされたときの愉快度とPT2, PT4のまじめ度との間には弱い正の相関がある（回答者全体ではそれぞれ0.24と0.32。男女別に見ると男子ではそれぞれ0.27と0.30であり、女子では有意な相関があるのはPT4だけ（0.36）であるが、代わりにPT3との間に弱い有意な負の相関（-0.31）がある）。つまり、親しいクラスメイトから「ふまじめだね」と言わされて愉快だと感じる人ほどPT2, PT4のまじめ度を比較的高く判定し、女子について言えばPT3のまじめ度を低めに判定するかすかな傾向があるということである。回答者全体としてはPT3のまじめ度はPT1に次いで高く、PT2, PT4のまじめ度は非常に低かったことに鑑みれば、以上のことは次のようなことを意味していると考えられる。すなわち、親しいクラスメイトから「ふまじめだね」と言わされて愉快だと感じる人のうちのある者はまじめ志向が薄いため、社会基準だけを満たすPT3には反発してあまり高い評点は与えず、逆に社会基準を満たさないPT2, PT4に対してはそれほどひどいことではないと言うかのように案外高い評点を与えるということである。ここにも社会基準に対する敏感さが垣間見える。

3.2.4. 設問Ⅲの分析と考察

設問Ⅲに対する回答は自由記述であるため回答を明確な範疇に一意的に分類することが難しく、統計的分析にはなじまない。従ってここでは回答を大づかみに分類した上でそれらに該当する回答の数を示し、全体の傾向を述べることにする。回答を分類するにあたっては以下に示すように、本稿の仮説の中心概念である「自己基準」と「社会基準」の観点から主として行った。ただし、「まじめなことをした時」のように「まじめ」をそのまま用いていてそれがどのような意味であるかが文脈から明らかでない回答は別個に扱った。なお、一つの回答を複数に分類すること

ともあるので、回答数の合計は回答者数とは一致しない。以下、「まじめ／ふまじめ」と「うれしい／不愉快だ」を組み合わせた4個の場合のそれぞれについて分類し、具体的に回答例をいくつか挙げながら考察する（回答の引用に際しては誤字の訂正を含め、意味を変えない範囲で表記をある程度統一した）。

①「まじめ」だと言われてうれしいと感じるとき

自己基準と社会基準の両方に関わるもの 37／自己基準だけに関わるもの 11／社会基準だけに関わるもの 4／単に「まじめにやったとき」などとだけ書いているもの 8／自分とある種の関係にある人から言われたときとするもの 7／その他 5／うれしいと感じる状況がありえないとするもの 18／無回答（空欄） 34

自己基準と社会基準の両方に関わるものとして分類したのは「勉強しているとき」「全コマ授業に出たとき」「自分ががんばっているとき」「努力しているとき」「人に席をゆずるとか親切ないい事をしたとき」「人の役に立ったとき」「バイトで、しなくともいいような仕事もしているとき」などである。「努力しているとき」などのよう、「勤勉」という言葉でくくれそうな状況が多くかった。とりわけ興味深いのは「自分が自分のやった行為を社会的にも自分の価値観内でも正しいと思って満足しており、相手がそれに関与していない状況」という回答である。調査②では質問紙において「社会的」「価値基準」などという言葉は一切用いなかったにも関わらずこのような回答があったことは筆者らの仮説が単に理論上だけのものではないことを示唆しているように思われる。

自己基準だけに関わるものとして分類したのは「一生懸命やっているとき」「自分の好きなことに取り組んでいるとき」「物事に集中しているとき」「自分の趣味の分野に関して言われたとき」などである。「一生懸命」は自己基準だけに関わると言えるかどうか微妙だが、「頑張る」などと共に起する場合に限って自己基準と社会基準の両方に関わるものとして扱った。

社会基準だけに関わるものとして分類したのは「そうじをしているとき」「無遅刻無欠席をほめられたとき」「責任を背負っているとき」「苦行をこなしているとき」である。

自分とある種の関係にある人から言われたときとするものとして分類したのは「親しい友人からほめ言葉として言われたとき」「目上の人と言われたとき」「教師、上司など、地位が上の人から言われたとき」などである。「先生」「先輩」なども含め、目上の人と言われたときとする回答（5）が目立つ。

傾向としては、自己基準と社会基準の両方に関わるもののが最も多く、自己基準だけに関わるものもかなり多い。社会基準だけに関わるものは少ない。「うれしいと感じる状況がありえないとするもの」が18と、全体の15%あることも見逃せない。

②「まじめ」だと言われて不愉快だと感じるとき

自己基準と社会基準の両方に関わるもの 12／自己基準だけに関わるもの 1／社会基準だけに関わるもの 6／言われる覚えがないときとするもの 12／本心から言ったのではない

と思われる言い方をされたときとするもの 16／自分とある種の関係にある人から言われたときとするもの 10／その他 9／不愉快だと感じる状況がありえないとするもの 25／無回答（空欄）34

自己基準と社会基準の両方に関わるものとして分類したのは「テスト勉強をしているとき」「まわりがみんなやっていないのに自分だけ頑張ったりしているとき」「課題などを真剣にやってない人から、自分がやったときにそう言われたとき」「授業に来てない人に言われたとき」などである。

自己基準だけに関わるものとして分類したのは「邪魔されたくない程度に集中しているとき」だけである。

社会基準だけに関わるものとして分類したのは「車が来ないのに赤信号を待ったり、ささいな規則を守るとき」「早起きしたとき」「当たり前にやるべきことだと自分では思っていることをしているのに、他人にとってはそれが当たり前ではないようで、言われたとき。マナーとか道徳・自己責任に関することが多い気がする」「お酒があまり飲めないとき。ハメをはずせずにいるとき」などである。

言われる覚えがないときとするものとして分類したのは「それほどまじめなことをしないとき」「とくになんもしてないのに言われるとき」「やる気がないことを適当にしているとき」「普通に生活しているとき」などである。「当たり前のことをやってるだけなのに言われるとき」も一応ここに分類したが、すぐ上で述べた社会基準だけに関わるものに含めた回答例へ移行する境界例と見ることもできよう。

本心から言ったのではないと思われる言い方をされたときとするものとして分類したのは「お世辞で言われたとき」「冷やかしのように聞こえるとき」「いやみっぽく言われたとき」「思ってもいないのにそう言う人が相手のとき」「言い方がバカにしてるようなとき」などである。

自分とある種の関係にある人から言われたときとするものとして分類したのは「自分をよく知らない人に言われたとき」「親しくない人に言われたとき」「血縁者のだれからも、それが贅辞であろうと、皮肉であろうと、そう形容されたとき」「親しい人に言われたとき」「基本的に、友達から言われるとき」などである。自分をよく知らない人、親しくない人に言われたときとする回答（6）が目立つ。

①の場合と異なり、社会基準だけに関わるもの（しかも社会基準に従っている状況）がかなりあるのに対し自己基準だけに関わるものはほとんどない。ここから社会的規範に従順であるという「まじめ」の持つ一側面を忌み嫌う傾向を読み取ることができる。その一方で、「不愉快だと感じる状況がありえないとするもの」が21%あった。

③「ふまじめ」だと言われてうれしいと感じるとき

社会基準だけに関わるもの 2／言われる覚えがあるときとするもの 5／言われたときの相手の意図に関わるもの 4／自分とある種の関係にある人から言われたときとするもの 6／その他 6／うれしいと感じる状況がありえないとするもの 64／無回答（空欄）36

社会基準だけに関わるものとして分類したのは「少しワルな行動をやって、せいせいしたとき」「意図的に学校をサボったとき」である。

言われる覚えがあるときとするものとして分類したのは「あえてふまじめなことをしたとき」「ふまじめだといわせようとしたことをしたとき」「ふまじめであるべきとき」などである。

言われたときの相手の意図に関わるものとして分類したのは「楽しい空気を作ろうとしているとき」「共感を込めて言われたとき」などである。

自分とある種の関係にある人から言われたときとするものとして分類したのは「親しい間の友人のときのみ」「友達から言われるとき」などである。回答に現れたのは親しい人や友達などがほとんどで、親しくない人や目上の人には全く現れなかった。

①, ②と比べて③では、うれしいと感じる状況がありえないとする回答が54%と非常に多く、具体的な状況を書いた回答が少ないのではっきりとした傾向について述べることは難しいが、社会基準だけに関わる回答（しかも社会基準に反している状況）があったのに対し自己基準に関わる回答が全くなかったことは指摘する必要があろう。つまり、「ふまじめ」と言われてうれしいと感じるのは社会的規範に反したときであって自己の信念や願望を曲げたときではない、ということである。このことは②の最後で触れた、社会的規範に従順であるという「まじめ」の持つ一側面を忌み嫌う傾向と表裏一体のものと見ることができる。

④「ふまじめ」だと言われて不愉快だと感じるとき

自己基準と社会基準の両方に関わるもの 20／自己基準だけに関わるもの 3／社会基準だけに関わるもの 6／単に「自分としてはまじめにやっているつもりのとき」などとだけ書いているもの 11／自分とある種の関係にある人から言われたときとするもの 10／ふまじめな人に言われたときとするもの 3／いつでも不愉快だとするもの 7／その他 11／不愉快だと感じる状況がありえないとするもの 16／無回答（空欄）38

自己基準と社会基準の両方に関わるものとして分類したのは「ちゃんと勉強したとき」「努力してるとき」「あることに『自分はちゃんと取り組んだ』という自覚があるとき」「頑張ったとき」「テストの点数が悪かったとき」などである。

自己基準だけに関わるものとして分類したのは「真剣なとき」などである。

社会基準だけに関わるものとして分類したのは「責任を背負っているとき」「正当な行為だと思われることが正しく評価されなかったとき」「珍しくハメを外していたときに言われたとき」「寝坊して学校を休んだとき」「夜遅くに家に帰ったとき」「リラックスしているとき」などである。「正当な行為だと思われることが正しく評価されなかったとき」は社会基準を満たしている（と思っている）場合であり、「珍しくハメを外していたときに言われたとき」以下の回答例は社会基準を満たしていない（かもしれないと思っている）場合である。

自分とある種の関係にある人から言われたときとするものとして分類したのは「親に、先生に言われるとき」「特に親しくない人に言われたとき」「あまり知らない人に言われたとき」などである。②の場合と同様、自分をよく知らない人、親しくない人に言われたときとする回答（7）

が目立つ。

④については、「自分としてはまじめにやっているつもりのとき」などとだけ書いているものが目立った。これは自己基準と社会基準のどちら（あるいは両方）を念頭に置いているのか明らかでないのでひとまずおくとして、自己基準（及び社会基準）に関わる回答と社会基準だけに関わる回答との間には違った傾向が見られる。即ち、前者のほとんどは当該の基準を満たしている（と思っている）にも関わらず「ふまじめ」だと言われたときに不愉快だと感じるとしているのに対し、後者については当該の基準を満たしている（と思っている）場合よりも基準を満たしていない（かもしれないと思っている）場合に「ふまじめ」だと言われたときに不愉快だと感じるとしているもののほうがむしろ多いのである。言い換えれば、前者に見られるのは自分としてはちゃんとやっていると思っていることが評価されていないと感じることから来る不満であるのに対し、後者に見られるのはむしろ、大したことではないはずのことが不本意にも社会的な逸脱とみなされていると感じることから来る不満なのである。なお、「不愉快だと感じる状況がありえないとするもの」がやや意外なことに13%もあった。

①～④を総括してこの節のまとめとしたい。①と④は「まじめ」を肯定的に評価するという点で共通しており、②と③は「まじめ」を否定的に評価するという点で共通している。「まじめ」を肯定的に評価する場合には筆者らの考える「まじめ」の原型、即ち自己基準と社会基準の両方に関わる回答が圧倒的に多いのに対し、「まじめ」を否定的に評価する場合にはそれほどでもなく社会基準だけに関わる回答がかなり目立つ。このことから、「まじめ」を総体的にとらえたときに回答者は自己基準よりもむしろ社会基準の方により敏感に反応しているということが言えるのではないかと考えられる。

4. 結論と今後の課題

筆者らは原型意味論の枠組みに基づき「まじめ」が表す意味範疇についていくつかの仮説を立てた。まず、山中（1997）で提案したく良いと考えられている価値基準を知った上で、それに沿ってふるまおうとするさま>という基本義から出発しつつ、「良いと考えられている価値基準」に「自己基準」、「社会基準」の大きく二種類があると考えた。更に、これら二種類の価値基準と共に満たすような態度が「まじめ」の原型であること、社会基準のほうがより重要であることを仮定した。

以上の仮説に従い「まじめ」の二つの構成要素を持つか欠くかによって4通りのパターンを作り、仮想の状況を多数設定しその中でこれらのパターンに対応する行動をとる人物について、「まじめ」という形容がどの程度当てはまるか答えさせることにした。客観的に各状況をパターンに割り当てるために、まず各状況が自己基準、社会基準をどの程度満たすかについて回答者自身がどのように判定しているかを調査した（調査①）。調査①の結果に基づき、想定したパターンに適合する計15状況を選び出した。

次に、調査②として、「まじめ」という言葉に関する質問紙調査を行ったが、その設問の内容と設問に対する回答を分析した結果は次のようにまとめられる。

設問Ⅰでは、調査①で選んだ4パターン15状況に新たに2パターン11状況を加え、それらの状況に登場する人物について「まじめ度」を判定させた。まずパターンによってまじめ度に差があるかどうかを検定した結果PT2とPT6の対以外の全ての対の間に有意な差があることがわかった。自己基準と社会基準が関わるPT1~4について言えば、自己基準と社会基準と共に満たすPT1のまじめ度が最も高く、自己基準と社会基準のどちらも満たさないPT4のまじめ度が最も低くなってしまっており、この限りでは「まじめ」の原型に関する仮説が裏付けられたと言えよう。一方、自己基準と社会基準のどちらがより重要であるかについては、PT3のまじめ度がPT2のそれより高かったものの、PT3に属する各状況の調査①における自己基準と社会基準の平均値の合計がPT2に属する各状況のそれらに比べ高い傾向にあったため、結論を留保せざるを得なかった。結論を出すためには、調査②のPT1~4に属する各状況のまじめ度を従属変数とし、それらの状況が調査①において獲得していた自己基準の判定値と社会基準の判定値を二つの独立変数として、従属変数がどちらの独立変数によってより大きく影響されるかを分析する必要があるが、調査①の回答者と調査②の回答者が異なるため、両調査の結果の相関を調べるわけにはいかなかつた。にも拘らず、PT3のまじめ度がPT2のそれより高いという結果が出たことは注目に値しよう。自己基準よりも社会基準のほうがよりまじめ度に寄与しているのではないかという仮説を検証するのに適した調査を計画・実施することが必要である。さらに、各パターンに属する状況同士の間にも有意差があり、自己基準と社会基準の充足度の組み合わせだけでなく個々の状況に特有の要因もまたまじめ度の判定に影響していることが窺える。

設問Ⅱでは、回答者自身について「まじめだね／ふまじめだね」と言われた場合、どのように感じるか評価させた。まず、概して言えば「まじめ」と言われた場合のほうが「ふまじめ」と言われた場合よりも愉快度は高かったが、それは「どちらとも言えない」にあたる点数を大きく超えるようなものではなかった。次に、まじめ系列4場面同士の間、及び、ふまじめ系列4場面同士の間でも愉快度に有意差が観察された。更に、ここでは場面間の序列に関して性別による違いが観察された。

設問Ⅰに対する回答と設問Ⅱに対する回答との間には興味深い若干の相関が観察された。

設問Ⅲでは、回答者自身について誰かに「まじめ／ふまじめ」と言われて、うれしい／不愉快だと感じるような具体的な状況を記述させた。「まじめ」を肯定的に評価する場合には自己基準と社会基準の両方に関わる回答が最も多いのに対し、「まじめ」を否定的に評価する場合には社会基準だけに関わる回答も目立つことが観察された。

「まじめ」の原型に関する仮説が裏付けられたことを別として、設問Ⅰ～Ⅲに対する回答の分析を通して見えてきたのは、「まじめ」に関して大学生が持っている、社会基準への志向性あるいは規範意識といったものである。この規範意識ということは辞書の記述などではあまり重視されてこなかったが、今回の調査でかなりはっきりしたと考えている。もっとも、今回の調査は若年層を対象としたものであり、今述べたことがどの程度一般化できるかは今後中高年層を対象とした調査によって明らかにされなければならない。

このことに関連して最後に、辞書の意味記述の改訂の必要性について述べておきたい。筆者の

一人、山中は既に約 10 年前に前稿（山中 1997）で国語辞書などに見られる「まじめ」の語釈において‘規範的’という意味の記述が不足していることを指摘しているが、本稿を成すにあたり改めて現在出版されている辞書を調べてみた。前稿で検討した 33 冊のうち追跡できた 21 冊及び前稿以降に初版が出た 3 冊に関する限り、この点に関して何ら改善は見られなかった⁹。辞書の意味記述というものは、言うまでもなく言葉の使用の実態に即したものである必要がある。今回の調査は大学生だけを対象としたものであり、調査の規模も大きいとは言えないが、その結果を通して見えてきた規範意識を無視することは妥当ではなかろう。特に、比較的改訂しやすい国語辞典の執筆や編集に携わる人々に対し、本稿の結論を考慮されんことを切に望みたい。

注

- 1 もっとも国分（1985）は、まじめとは「行動に意識性と責任性が伴っていること」と定義し、その内容を交流分析の立場から禁止・命令に忠実なたてまえ志向のまじめさ、相手にとってよかれと思うことを行う親心志向のまじめさ、損得計算が主になったおとな心志向のまじめさに分類している。
- 2 文脈的意味とは特定の文脈において具体的に観察される意味を指し、意義素とは文脈から独立した抽象的な、語に固有の意味を指す（国広 1982）。本稿では両者を区別するために、前者を‘’の中に、後者（またはその一部）を< >の中に入れて示す。
- 3 「自分の価値基準」「社会の価値基準」という表現は大学初学年の学生にはやや馴染みがないようと思われたため回答欄では代わりに「*の意向（*は登場人物の名前）」「社会の規範」を用い、これらの意味については必要に応じて回答要領を振り返って見るよう指示した。
- 4 調査②で回収した質問紙のうち 7 名分には設問 I と設問 II のいずれかに記入漏れがあったが、得られた回答を最大限に生かすため、これらもデータとして扱った。ただし一つの設問に関しては全ての質問項目に答えていない場合、分析から除外した。従って設問や分析方法によって回答者数に多少の出入りがある。
- 5 F は分散分析の F 値を表し、p は有意確率を表す。なお、本稿のこの後の論述では特に示さない限り有意水準を 5 % とする。
- 6 以下で用いる不等号などの記号の意味については、「 $x > y$ 」は x が y より有意に大きいことを、「 $x = y$ 」は x と y の間に有意差がないことを、「 $w \geq x \geq y \geq z$ 」は w と x 、 x と y 、 y と z の間には有意差がないが、 w は y や z より、 x は z より有意に大きいことを表す（最後の点を一般的に述べれば、「 \geq 」が連続する場合、隣接する 2 項の間には有意差がないが二つ以上の「 \geq 」によって隔てられた 2 項の間には有意差があることを表す）。ただし、 w 、 x 、 y 、 z などはそれらの名で表される状況、パターン、場面に与えられた判定値の平均を表す。
- 7 このような見方は、次に引用する和田（2003:24）の「まじめ」についてのイメージと合致する：君たちにとって、まじめとはどういうことなのだろうか？親や教師の言いなりになってしまふとか、反抗的なことができないとか、若者らしい価値観がもてないと、いわゆる「悪い」ことができないとか、勉強のような「正しい」ことばかりやってしまうとか、いずれにせよ、大人の価値観や道徳に従ってしまって、自分の本能のままに生きられないというイメージがある。
- 8 ベネッセ教育研究所が行った高校生の意識調査の報告（矢内 2002）によれば、「あなたはまじ

めだね」と言われてうれしいかどうかを 1355 人の高校生に聞くと全体として素直に喜ぶ回答の方が多いため、誰から言われるかによってかなりの差がある(担任の先生からだと「うれしい」48% 対「うれしくない」30%; (以下同様に) 親から, 37% 対 22%; クラスマートから, 29% 対 16%)。筆者らの調査の結果は「うれしい」度合いが先生, 親, クラスマイトの順に高いという点においては同様の傾向を示しており, 5 年前の高校生が現在の大学生の年代に当たることを考えると, 予想できる結果と言えよう。

- 9 調べた辞書は次の通り (五十音順, 『 』は省略, 括弧内の数字は版数)。
前稿時点の 21 冊: 岩波国語辞典 (6), 旺文社国語辞典 (10), 学研現代新国語辞典 (改訂 3), 角川国語辞典 (新版 413), 角川新国語辞典 (115), 角川必携国語辞典 (6), 広辞苑 (5), 講談社国語辞典 (3), 清水新国語辞典 (10), 集英社国語辞典 (2), 新国語例解辞典 (1, 小学館), 新選国語辞典 (8, 小学館), 新潮現代国語辞典 (2), 新潮国語辞典 - 現代語・古語 (2), 新明解国語辞典 (6), 大辞泉 (増補・新装版 1), 大辞林 (3), 日本国語大辞典 (2), 日本語大辞典 (2, 講談社), 標準国語辞典 (6, 旺文社), 例解新国語辞典 (7, 三省堂)
前稿以降の 3 冊: 三省堂現代新国語辞典 (3), ベネッセ新修国語辞典 (1), 明鏡国語辞典 (1)

参考文献

研究文献:

- 菊入三樹夫 (1997) 「わが国の学校教育における『まじめさ』の研究 - その 1. 『まじめさ』の特質と問題点 -」『東京家政大学研究紀要』37 (1), 83-90
久島茂 (1998) 「語彙 (理論・現代)」『国語学』193, 48-56, 武蔵野書院
国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』大修館書店
国分康孝 (1985) 「『まじめ』の心理」『児童心理』39 (15), 1964-1970, 金子書房
佐々木基一 (1964) 「“まじめに考える”とはどういうことか」『新日本文学』(通信版) 19 (11), 156-160, 新日本文学会
飛田良文・浅田秀子 (1991) 『現代形容詞用法辞典』東京堂出版
森田良行 (1996) 『意味分析の方法』ひつじ書房
矢内忠 (2002) 「半数強が『まじめ』ってダサイ!」『内外教育』5322, 10-11, 時事通信社
山中信彦 (1997) 「『まじめ』の意味分析」『国語学』191, 98-110, 武蔵野書院
Coleman, Linda & Paul Kay (1981) Prototype semantics: the English word *lie*, *Language* 57 (1), 26-44.

「まじめ」をテーマとする書籍:

- 千石保 (1991) 『「まじめ」の崩壊』サイマル出版会
森政弘 (1984) 『「非まじめ」のすすめ』講談社文庫
森政弘 (1995) 『[非まじめ] をきわめる』講談社 + α 文庫
山本明 (1969) 『反マジメの精神』毎日新聞社
和田秀樹 (2003) 『まじめすぎる君たちへ』PHP 文庫

謝 辞

埼玉大学教養学部の高木英至教授からは質問紙調査の実施はもとより質問紙の内容の検討やデータの統計的処理に関しても多大なご援助を賜った。この場をお借りして厚くお礼申し上げる。ただし本稿の不備の一切は当然筆者らの責に帰する。

(投稿受理日：2007年12月26日)
(最終投稿受理日：2008年4月11日)

山中 信彦（やまなか のぶひこ）
埼玉大学教養部
338-8570 さいたま市桜区下大久保255
yamanaka@mail.saitama-u.ac.jp

安田 美幸（やすだ みゆき）
株式会社 角産
179-0083 東京都練馬区平和台3-26-15
pwqwf351@ybb.ne.jp

Prototype semantics of the Japanese word *majime*: Norm consciousness observed in a survey of university students

YAMANAKA Nobuhiko

Saitama University

YASUDA Miyuki

Kakusan Co., Ltd.

Keywords

self standard, social standard, situation, *majime*-score, pleasantness-score

Abstract

The Japanese word *majime* may mean either ‘earnest’ or ‘normative’ depending on the context. In a previous paper Yamanaka (1997) argued that these two meanings could be derived from one sememe ‘ready to behave in accordance with an accepted standard, based on a full knowledge of that standard’. Based on this, we formulated a prototype for *majime*, consisting of two elements: the fulfillment of a self standard and that of a social standard.

In this paper, we examine actual uses of *majime* based on a survey of 119 university students. First, hypothetical situations which described acts embodying four combinations of these two elements were presented to subjects, to be judged on the degree to which the character in the situation could be said to be *majime*. The situations containing and lacking both elements received the highest and lowest scores respectively. Also, the situations only fulfilling a social standard received higher scores than those only fulfilling a self standard. Next, subjects were asked how pleasant they felt if they were told that they were *majime/fumajime*. On the whole, the responses to *majime* showed higher scores than the responses to *fumajime*, but only slightly higher than the score corresponding to the response “I can’t say”.

We conclude not only that the prototype theory of *majime* is confirmed but also that university students are sensitive to social standards included in the meaning of the word *majime*, which should be mentioned in its semantic description in dictionaries.